好きこそものの上手なれ

第38話

回胴倒錯者

—PACHISLO FREAK—

その日

その日はとうとうやって来た。T副主任の引退する日だ。この業界のほとんどの従業員は唐突に辞めていく。今日で辞めます、明日で辞めます、あるいは、ある日突然来なくなる。ほとんどが以上のパターンであり、長くても今週いっぱいというのが関の山だ。その点、堅く律儀なT副主任はきっちり1ヶ月前に表明している。その1ヶ月がとうとう消化されたのだ。この日が来るまでT副主任がそこにいるのが当たり前で、それは今日のこの日が来るのを忘れてしまうほどだった。しかし実際この日が来てしまうと、その実感は色濃くなり、重たく暗い空気を感じてしまう。従業員の表情にも覇気はなく、またそれは私も例外ではなかった。その性格から決して人に嫌われるタイプではなかったT副主任。そんなだったからこそ、余計にそこの空気の変化が身に染みた。ただ、それとは逆にいつもどおりのなんの変化もない人物もそこには存在していた。それはまさに引退を当日に控えた本人である。正直、なんの変化もなかったどうかは不明であるが、少なくとも外見からはその変化は皆無に等しかった。最後まで与えられた仕事を確実にこなし、手を抜くなどは全く無く、その堅さや律儀さは最後の最後まで寸分の狂いも無く徹底された。そんな中ではあったが、真の思いはどんなだったのだろうか。安堵？不安？爽快？それをいくら探ろうとしても、ただでさえ愚鈍な私には、そのポーカーフェイスで固められたT副主任から何一つ読み取ることはできなかった。

もう一人さらに輪をかけて愚鈍な人物がいた。みなさんもご想像通りの店長である。店長の場合、皆とは逆の意味でT副主任の引退を気にしていたのだ。グランドオープンからの付き合いだというのにT副主任のことをほとんど分かっていない。その堅さや律儀さから、仕事には忠実であり忠勤、マイナスの付加価値もなければプラスのそれもない。店長はそれを知ってか知らずか、引退を表明したその日から、T副主任に設定の打ち変え業務をさせなくなったのである。辞めていく人間には任せられない、信用できない、辞めていく人間は何をしてもおかしくない。そう私に話し、設定の打ち変えはすべて私が任されていたのだ。たしかにそれも一理あると思う。しかし私には、そんなことをする人間が1ヵ月も前に引退表明などするとは思えず、また、T副主任にかぎってそれはあり得ないと考えていた。この話をされたとき、T副主任はどう感じたのだろう？表向きはきっと冷静で、なんの変化もなかったのだと思う。ここでもT副主任の本意など想像もできなかったが、少なくとも、この出来事が「辞める」という答えが正しいと決定付ける一つの要因になったのは間違いなかったと思う。

その時

T副主任はこの一ヶ月すべて早番だった。設定を打ち変えさせないという理由からだろう。その最後の日も例外なく早番であり、その業務も今まさに終わり終礼が始まろうとしていた。遅番で出勤の責任者は早番の終礼に参加するということはなかったが、この日ばかりは自然と参加していた。

班長から一通りの今日の反省点や、明日の連絡事項が従業員に報告され、T副主任に話が振られた。いつもは「特にありません」で済ますT副主任からは今日ばかりは少し長めのコメントが発せられた。

「今日で私はこの店を去ります。班長、主任、そして店長のいうことをよく聞くように。主任からは何かありますか？」

そう私に振られたが特に何も言えず「いえ、ありません。終わりましょう」そう答えた。班長は私の言葉を聞き、「では終わります、今日も一日お疲れ様でした！」

「お疲れ様でした！」

いつもの様に皆から復唱される「お疲れ様でした」のかけ声。この日のそれは、確実に今まで聞いた中で最も大きかった。

終礼が終わって1時間ほどが経過したころ、わたしは控え室に向かっていた。そろそろT副主任が帰る頃だろうと思ったからである。案の定そこにT副主任はいて、荷物の整理などを黙々としていた。

「あらためてお疲れ様でした。今後の予定とかあるんですか？」

「昔やってた仕事に復帰することになっているよ」

「A君はまだまだ続けるの？」

「分かりませんが、今は辞めれませんよ。Tさんに先に辞められましたので（笑）」

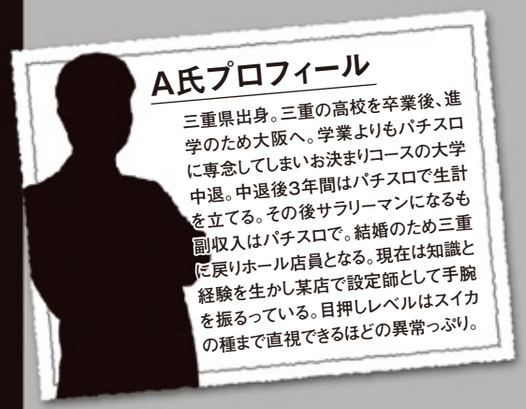
「確かにA君まで辞めると店が回らんね（笑）頑張っていい店にして下さい」

その時インカムが鳴り、

「なんかインカムで呼ばれました、またくだらないトラブルのようです。行ってきます」

「俺も、もう行くわ、お疲れさん」

その言葉を最後にTさんは店を後にし、私はホールへ向かった。そのホールへ向かう途中、なんだか分からない満足感と新たな決意のようなものに包まれていた。Tさんとの最後の会話、その中であのポーカーフェイスは崩れていたのだ。今まで予想もできなかったその秘めたモノ、それを少し覗かせてもらったような、そんな気がしたのだった。



A氏プロフィール

三重県出身。三重の高校を卒業後、進学のため大阪へ。学業よりもパチスロに専念してしまいお決まりコースの大学中退。中退後3年間はパチスロで生計を立てる。その後サラリーマンになるも副収入はパチスロで。結婚のため三重に戻りホール店員となる。現在は知識と経験を生かし某店で設定師として手腕を振るっている。目押しレベルはスイカの種まで直視できるほどの異常っぷり。

新体制

開店当初に指導係として来ていた主任、その仕事ぶりは過酷そのもので、開店作業から閉店作業まで、ほとんど1日中業務に携わっていた。今はその時の主任と同じ役職にある私。自分でも信じられないような感覚だった。同じ役職である以上、同じことができなければいけない。前主任の仕事っぷりを見てきた私にとって、そのプレッシャーは計り知れないものがあった。取り合えず真っ先に店長に言われたのが「従業員の出勤管理」、俗にいうシフト表の作成である。前主任が去ってから店長が作ってきたが、とうとう私に任せるということだった。

とりあえず見よう見真似で作ってみることに。そうすると不具合がさっそく発生した。Tさんがいなくなった今、開店作業ができるのは私のみで、閉店作業のお金の計算や設定の打ち変えをできるのは店長と私だけだった。さらに店長は開店当初から、設定の変更やお金の計算をするのはそれができるものが休みのときだけで、普段からすることは絶対になかった。となると、とても嫌なシフト表が脳裏に浮かぶ。1日中休みなく働くというシフトである。もしかして店長は、労働基準法に違反するようなそのシフトを自分で作るのが嫌だったのではないだろうか？それを自己責任で作れと、私にそう言ったのではないだろうか？はたして私はどのようなシフトにすればいいのだろうか、店長に毎回閉店業務を頑張ってもらうべきなのか？その板ばさみの中で、暫くパソコンのシフト管理画面を見つめているだけだった。

回胴倒錯者3周年記念イベント in 松阪京楽

前回の2周年に引き続き開催された、同3周年イベント。今回は松阪市にある「松阪京楽」様にて開催されました。開催に協力して頂いた同店舗様に深く御礼申し上げます、ありがとうございました。

さて、当日は私の都合上、夜遅くしかお邪魔することはできませんでしたが、その状況を少々報告いたします。オススメ機種に選ばれていたジャグラー・沖スロ・エヴァの島を見渡すと、あからさまな高設定台があちこちにありました。それもけっこうな稼動で、1万ゲームを突破しているのも多数窺えました。もちろんその他の機種にもドル箱を積み上げたと思われるボーナス回数・確率の台が多数ありました。

しかし少しショッキングなこともありました。なんとそこには新花火があったのです！なぜそれがショックだったかというと、以下のような話が私とゲッツ編集局との会話にあったのです。

編「あ、もしもしAさんですか？倒錯者イベントはどちらのホールで開催しましょうか？」

私「前回が伊勢での開催だったので、今回は松阪でお願いします。」

編「分かりました、松阪ですね」

それから数日後、

編「もしもしAさんですか、開催店が『松阪京楽』様にきまりました。何かイベント内容において希望とか要望とかありますか？」

私「新しい花火って入ってますか？あの『青ドン花火の極み』ってやつです」

編「入ってませんね。緑はあったと思いますが」

私「分かりました、ではエヴァなどの普通のタイプの強化をお願いします」

編「伝えておきます」

というような打ち合わせがあったからです。確かにこの話をしたのは同イベント開催の二ヶ月近くも前の話だったので、その時は無かったのかもしれません。しかし、当日はそこに新花火があったのです。新花火に少々ハマっていた私は、本当はそれを最も強化してほしかったのです。といっても、新花火も当日はよく出てたんですけどね（笑）

さらにこの日はあいにく店長が会議で不在でしたので、詳しい状況なども聞けず仕舞いでした。近日、ゲッツさんとお邪魔しますので、その時はよろしくおねがいしますね。